

報告書名：個別インタビュー手法による歯間部清掃用器具の使用率向上のための要因分析および健康教育プログラムの開発

研究者名：森田十誉子、小川洋子、菊池恵子、三田理絵、山崎洋治、渋谷耕司

所 属：(財)ライオン歯科衛生研究所

【目的】

8020 を達成するためには、通常のブラッシングでは届きにくい歯間部のプラークを除去し、歯周病を予防することが重要であるが、歯間部清掃用器具の使用率は、まだ低いのが現状である。そこで本研究は、歯間部清掃用器具（歯間ブラシ）の使用に繋がる要因を明らかにし、健康教育に導入することを目的に行なった。

【対象及び方法】

1.歯間ブラシの使用に繋がる要因の抽出；対象は某企業（製造業）の 40 歳以上 59 歳以下の従業員で、2005 年の歯科健康診断において、C P I の個人コードが 2 および 3 の集団のうち、歯間ブラシを 1 週間に 1 回以上使用している人（使用者）17 人、歯間ブラシを過去に使用したが現在は使用していない人（非使用者）12 人の 29 人とした。使用者には使用理由、非使用者には非使用理由をアンケート調査した。さらに、評価グリット手法を活用したインタビューにより、アンケートで記入された理由を中心に、使用・非使用要因と、その背景(口腔に関する意識)、使用者には使用によるベネフィットを引き出し、構造図に示して、要因を抽出した。

2.健康教育プログラム案の作成および評価；使用者の使用要因、背景要因、使用のきっかけから、歯間ブラシの使用向上のための健康教育プログラム案を作成し、歯間ブラシ非使用者 15 人を対象に健康教育を試行した。

【結果及び考察】

- 1.使用者の使用要因は、「歯石の付着を予防」「歯の健康を保つ」「う蝕の予防」「プラークの除去」「口臭の予防」「不快感を除去」等であった。その背景要因および使用のきっかけを分析すると、使用者に口腔への関心が高い集団と低い集団があることが認められた。関心の高い集団は、口腔の不具合を自覚（「歯肉退縮で歯石を自覚」など）しており、自発的に歯間ブラシを使用していたケースと、歯科医院での歯科指導により使うようになったケースがあった。関心の低い集団は、使用する前は口腔の不具合を自覚しておらず歯ブラシで十分と思っていたが、自覚を促すような指導（「出血症状について説明」など）により、使用するようになった。また、使用を継続している理由は、「爽快感」「虫歯が減った」などの効果を実感しているためと考えられた。
- 2.非使用者の非使用要因は「面倒である」「使い方がわからない」等であった。非使用者にも口腔に対して関心が高い集団（「歯間部に隙間がある」などを自覚）と低い集団（「口腔は健全と思い込んでいる」など）が認められた。
- 3.調査法としてインタビュー手法を用いたことにより、アンケートだけでは得られない幅広い生活者の意識を引き出すことができた。
- 4.使用に繋がる要因の分析結果を基に、歯間ブラシの使用向上のための健康教育プログラム案を作成し、健康教育を実施した結果、歯間ブラシを使用するようになった人を認めた。

【結論】

歯間ブラシ非使用者を使用に繋げるには、口腔に対する意識を引き出し、非使用者で口腔に関心の高い人には、自覚している口腔の不具合を解消するような指導を実施し、関心が低い人には、口腔の不具合の自覚を促すような指導（出血、歯垢を鏡で見せるなど）を実施することが重要であると考えられる。また、使用者を継続的に使用させるには、効果を実感させることが大切と考えられる。